

(3) 人物・用語等の説明 「平塚市郷土史事典」より

ア 人物編

- 土屋氏 ・桓武平氏良文流中村氏一族で、鎌倉室町時代土屋郷の領主でした。土屋三郎宗遠の実子弥次郎忠光は、治承4年(1180)に石橋山の合戦に参戦しましたが、夭折(ようせつ・若くして死ぬこと)したので、弟の弥次郎宗光が後を継ぎました。宗光は鎌倉幕府の評定衆となり、北条氏滅亡後土屋氏は足利氏に属し、明德の乱には山名方に加勢して、京都二条大宮付近の戦いに11代宗貞をはじめ50余人が討死しました。その後、応永の乱には大内方につき、また、上杉禅秀の乱に禅秀方に組して、大森氏の小田原城を攻撃しました。大内氏・上杉氏が敗れると、この事により所領は没収されました。

その後の土屋氏は、甲斐(山梨県)・信州(長野県)・伊豆(静岡県)へと、それぞれ離散していったと思われます。

参考文献：土屋氏の歴史(前編・後編) 土屋政一著

- 土屋三郎宗遠 ・桓武平氏良文流中村氏一族で、平安時代末期から鎌倉時代、土屋郷・生沢の領主でした。中村莊司宗平の第3子として生まれ、早くから土屋郷に住し、在名をもって姓としました。兄土肥実平とともに源頼朝挙兵の時から参加歴戦し、鎌倉幕府の基礎固めに力を尽くしました。後の平家追討の屋島・一の谷・壇ノ浦の戦役に従軍しました。建久2年(1191)の藤原泰衡追討軍にも参戦し、のち出家し空阿と号し、土屋大乘院の堂宇を再建しました。建暦3年(1213)8月5日に90才で没しました。

- 土屋次郎義清 ・桓武平氏良文流中村氏一族で、土屋庶子分の領主でした。岡崎四郎義実の二男で、兄は真田与一義忠で、母は宗遠の姉桂御前です。宗遠ははじめ実子がなかったので義清を迎えました。文治5年(1189)の御塔供養のころから頼朝の随兵として警護の任に当たり、また、法勝寺九重塔造営に功がありました。建暦2年(1212)大学権助に任ぜられました。建保元年(1213)5月和田合戦により和田方に組し、土屋の一族を率いて勇戦しましたが、流れ矢に当たり戦没しました。鎌倉の寿福寺に葬られていると伝えられています。

- 岡崎氏 ・桓武平氏良文流三浦氏一族で、鎌倉時代に相模の国岡崎郷の領主でした。岡崎四郎義実の嫡男真田与一義忠の子千太郎実忠が祖父の跡を継ぎ、鎌倉の在番役となりました。吾妻鏡(東鑑)に載る与一太郎または岡崎左兵衛尉はこの人です。建保元年(1213)5月2日叔父土屋大学助義清とともに和田義盛に組し、子息太郎義国、同次郎実村等一族を率いて、和田合戦に参戦し奮闘しましたが敗れ、父子三人が討死しました。伝えるところによると、義国は甲州和田に逃れ、その後木曾六郎の女を妻とし太郎忠恒を生んだと言われています。

- 岡崎四郎義実 ・桓武平氏良文流三浦氏一族で、平安時代末期から鎌倉時代に相模

の国岡崎郷の領主でした。三浦莊司義継の四男で、三浦大介義明の弟です。四郎義実をはじめ三浦の沼田に居を構え、沼田の悪四郎と称しましたが、のち岡崎の地に移り在名をもって姓としました。治承4年（1180）8月頼朝挙兵の時馳せ参じ、以来頼朝創業の功臣として重きを成しました。建久4年（1193）大庭景義らと出家して致仕（ちし：官職を辞して隠居すること）しました。正治2年（1200）6月21日に没しました。嫡男は真田与一義忠で、次子は土屋小次郎義清です。

○源頼朝 （1147～1199）

清和源氏の嫡流で、鎌倉初代将軍になりました。左馬頭義朝の第3子で、父義朝とともに平頼盛の軍を防ぎ敗れ、捕らえられて伊豆蛭ヶ小島に流されました。

治承4年（1180）8月平氏追討の軍を起こし土肥、佐々木、岡崎、土屋、真田らを加えて石橋山に戦い、敗れて安房に逃げました。のち諸将士を糾合して進軍し、鎌倉に入り根拠を定め、同年10月平氏の軍を富士川で破りました。文治元年（1185）3月平氏を討滅し奥羽を鎮定しました。その後幕府の組織を整え建久3年（1192）に征夷大將軍となりました。

○源 実朝 （1192～1219）

鎌倉第3代将軍です。頼朝の次男で母は北条時政の女（むすめ）政子です。兄頼家が時政らに排斥されるや、朝廷から実朝の名を賜り征夷大將軍となりました。和歌の道に通じてその歌風は万葉の響きを持ち、当代の歌聖藤原定家と深い交遊関係がありました。実朝の家集「金槐和歌集」に土屋宗遠の老いの身や相模川を詠んだ歌が載っています。

承久元年（1219）正月鶴岡八幡宮に拝賀の儀を行おうとした時、頼家の子公暁に刺殺されました。

○北条早雲 （1432～1519）

室町時代の武将で、延徳3年（1491）伊豆国を手中にした伊勢新九郎長氏（のちの早雲）は、小田原の大森氏を覗（うかが）い、関東に進出しようとしてしました。明応3年（1494）大森氏頼が没し、計略をもって翌4年小田原城を襲いました。氏頼の子筑前守藤頼は城を追われ岡崎城に逃げ延びようとしてしましたが、岡崎城は三浦氏の居城のため真田城に拠りました。のち早雲は永正9年（1512）岡崎城を攻略し、続いて真田城も落とし関東平定の足がかりをつくりました。そして小田原城に入り、後北条（ごほうじょう）氏五代の基を開きました。早雲は剃髪して宗瑞と称しました。

○行 基 （668～749）

奈良時代の僧侶で、百済から来航した博士王仁の子孫とされています。橋をかけ、道路を切り開き、布施屋を設け、寺を建てて大衆の教導のために努力を続けたと伝えられています。また平塚市内の寺院には、行基作と伝えられる仏像が数多くあります。

○空 海 (774～835)

真言宗開祖で弘法大師とも言われます。平塚には空海の伝説が数多くあります。大同(806～810)のころ、伊豆国から相模国須賀の地に渡ってきて、しばらく滞在したと言われています。讃岐国多度屏風浦の人で、俗姓は佐伯(さえき)氏といい、幼名を真魚と言いました。入唐して帰国後真言密教を開きました。

○最 澄 (766～822)

天台宗開祖で伝教大師とも言われています。延暦23年(804)に空海と唐に渡り、翌年帰朝して天台宗を開きました。平塚市内の丘陵地帯には、天台宗寺院が数多くあります。

○退耕行勇 (1162～1241)

碩学僧(せきがくそう：大学者)で、普応国司でした。退耕(たいこう)とは、官途を退いて耕作に従事すること、官職を去って、民間に下ることです。真言宗芳盛寺の開基は宗遠で、開山は行勇(ぎょうゆう)と伝えられています。

行勇は酒匂村で生まれ、真言宗を学び僧となりました。のちに鎌倉八幡宮の供僧となり、永福・大慈の二院を管掌しました。二位尼政子に帰依され、明庵栄西が鎌倉に下って寿福寺を開くにおよび転じて禅宗となり、のち真言の奥義を究め天台を学びました。天台・真言・禅の三宗兼学の著名な学僧でした。

○若杉兵部

平塚市内に江戸時代神事舞太夫を勤めた家が9軒記録されています。その中に土屋村「若杉兵部」(相模国風土記)にあり、これらすべて江戸浅草田原町居住の田村八太夫というものの配下でした。神事舞太夫を舞々(まいまい)と称し、神社祭礼に奉仕し、神前で舞を行ったものらしいが、どのような舞を行ったか、またどのような歌謡によったものか、何の伝承も残っていません。古老の話によると、ごく簡単な仕草で変哲のないものであったといわれています。

しかし、舞々の家では、依頼を受けると自宅の神前で祈祷を行い一種の霊能行事をしていたようです。



※ 土屋村の地頭職

注	地頭職氏名	知行地	石	高
	神田次郎左衛門	中郡土屋寺分	20貫文	
注 2	石巻正寿	中郡土屋庶子分	50貫文	
	早雲寺領	中郡土屋惣領分	138貫200文	
	田沢久左衛正義	大住郡土屋村矢沢（他）	145石1斗5升 {750石余} 天宗院 {131石余}	45軒
	久保田又右衛門	大住郡土屋村惣領分	312石1斗5升	43軒
	長谷川権左衛門	大住郡土屋村惣領分（他）	18石	1軒
	久保田又右衛門	大住郡土屋村庶子分	4石9斗6升1合	
	横山金兵衛	大住郡土屋村庶子分	400石	45軒
	安藤内膳	大住郡土屋村庶子分	9石3斗5升9合	2軒
	多門松之助	大住郡土屋村庶子分	26石9斗1升4合	3軒
	大久保藤左衛門忠次	大住郡土屋村寺分	288石3斗4升6合	24軒
	柳沢彦左衛門	大住郡土屋村寺分（他）	200石（700石）	15軒
	倉橋惣三郎	大住郡土屋村寺分	78石	6軒
	加藤右近	大住郡土屋村寺分	132石9斗2升8合	13軒
	三好氏	大住郡土屋村人増	70石余	
注1 小田原北条時代 永禄3年(1558~1570)頃の小田原所領帳（北条役帳より） 注2 元禄9年(1696)中郡御私領方村高帳 （幕府から知行となった領地の石高帳より：広川の旧家窪田昆次氏所蔵）				



※土屋村の名主階級（なるべく数多く出ている文書を拾う）

（１）元和４年（１６１８） 熊野神社棟札写（蓑島貞雄氏所蔵）

小清水土佐守 ・ 大野七郎兵衛 ・ 水島五郎右衛門 ・ 木村五郎左衛門

（２）天明３年（１７８３） 熊野神社棟札写（蓑島貞雄氏所蔵）

小清水三郎兵衛 ・ 大野市右衛門 ・ 水島万右衛門 ・ 木村義右衛門
小清水金右衛門 ・ 山本荘右衛門

（３）寛政１０年（１７９８） 金目観音修理寄付控（光明寺所蔵文書）

五郎右衛門 ・ 重右衛門 ・ 万右衛 ・ 長左衛門 ・ 喜右衛門
勘右衛門 ・ 木村五郎右衛門

（４）天保３年（１８３２） 金目観音修理寄付控（光明寺所蔵文書）

三右衛門 ・ 重右衛門 ・ 虎蔵 ・ 四郎兵衛 ・ 八郎右衛門
仙次郎 ・ 五郎左衛門 ・ 清水隆碩 ・ 原竜輔 ・ 水島唯五郎
荻野六郎兵衛 ・ 大野仁左衛門

（５）慶應３年（１８６７）

宗次郎 ・ 重右衛門 ・ 長左衛門 ・ 国三郎 ・ 与兵衛

